

スローテンポ通信

第 36 号

2020年7月31日

発行:スローテンポ書店

〒323-0023 小山市中央町 3-7-1 ロブレ地階

☎ 0285-32-7211

Eメール usagimokamemo@gmail.com

ブログ『うさぎもかめも』

<http://usagimokamemo.blog.fc2.com/>

今月のおすすめ

○『本屋がアジアをつなぐ 自由を支える者たち』

石橋毅史著

ころから(版元)2019年 1700円+税

☆☆☆☆

著者は、『「本屋」は死なない』(新潮社)の著者であり、本屋が好きな人たちの間ではよく知られている。本好きとか読書ファンというよりも本屋ファンと言ったほうが当たっている。

本屋をめぐる旅は日本を越え、中国、韓国、香港、台湾に及ぶ。理屈ではなく、直接出会った人から話を聞き、本屋に関する事件、人物、エピソードをたくさん紹介する。そして著者は、本屋はそこで暮らす人々の自由を支えてきたと訴える。この号の記事も参照。

○『「偉大なる後進国」アメリカ』

菅谷洋司著

現代書館 2020年 1500円+税

☆☆☆☆

新型ウイルスのパンデミックは、崩壊しつつあった「世界帝国」の実像を暴露した。

人民に与えたはずの自由や、アメリカンドリームという言葉は幻想だった。マネーが豊かさを産み、国が豊かになると人々はハッピーになるというのもウソだった。そこにはだます人間がいて、だまされる人間がいた。

日本人がこの帝国から学べることは、だまされたと気付いたときに、黙っていないできちんと言うことではないだろうか。帝国の人々は気付いたときには言ってきたから、今も生きていられるのだと思う。

本屋は変革者たちの たまり場になる

今月紹介の『本屋がアジアをつなぐ』を読んだ。

著者は、『「本屋」は死なない』(新潮社)の著者であり、本屋が好きな人たちの間ではよく知られている。著者の本屋めぐりは、今も変わることなく続けられている。

本屋めぐりは日本を越え、韓国、香港、台湾にまで向かった。そして、本屋はそこで暮らす人々の自由を支えてきたと訴える。

もともと印象に残るのは、1980年の韓国光州事件の立役者が、一つの本屋だったという話である。

軍事政権下では、政権に批判的な本を持っているだけで刑務所に送られた。

書店主は学生たちに発禁本を届け、学生たちは本屋に通い学んでいった。光州事件のリーダーたちの理論的支柱をつくったのは本であり、その本を提供したのがこの書店主だった。今でも光州市民の誰もが知っているようだ。

本屋は変革者たちのたまり場だった。

神田にある内山書店が誕生したのは、日本が中国大陸に侵出する前であり、場所は東京ではなく上海だった。戦争中に日本に支店をつくったのが今の神田内山書店だ。

上海内山書店は、中国人独立運動家たちを支援し、活動家たちは書店を活動拠点にした。その中には魯迅もいた。

この本は歴史上の数々のエピソードを紹介する。それを通して歴史をしっかりと見つめれば、本屋が時代を切り開く変革者たちの拠点であったことに気付く。

本屋が変革者たちの拠点だなんて、今の時代にも通用するのだろうか。

現代社会は、まがりなりにも言論の自由がある。読みたい本を自由に求め、自由に読むことができる。読みたい本が書店になれば、ネット通販で自由に手に入れることができる。

ところが、よく考えてもらいたい。

調べものなどで必要に迫られて読む本は別として、本は、読み終えてはじめてその価値がわかる。少なくとも手にと

って見なければ、読もうと思うまでには至らない。そこにこそ本屋が存在する理由がある。

しかし、街に本屋がなくなっていく。

本が売れない。本屋は生き残りをかけて本を売る。生き残るのは規模の優位性を活かせる大手書店ばかりだ。

本好きは、「本屋に行っても売れ筋の本しか並んでいない。どの本屋も同じ本ばかりでまるで金太郎飴のようだ」となげく。

書籍の流通は、利益追求を求める大手出版社と流通業者が握っている。彼らは話題の人物に出版させたり、大規模広告を仕掛けたりしてベストセラーをつくり出す。書評家や文学賞などを利用したりもする。

インターネットやスマホの普及によって生活の中にSNSが入り込むと、人々は極端なまでに世間の流行を追い求めるようになった。テレビや新聞、雑誌も、生き残るために流行を追う。学者や評論家たちも生き残りをかけ、世間の流れに追随する。

このようにして、社会の見方や考え方にまで空気が出来上がる。人々は、それが何者かによってつくられていることに気付かない。そしてみなが同じような考え方、感じ方になっていく。

そして、空気に逆らう人を見つければ、よってたかって、「時代錯誤だ」、「世の中をわかっていない」などと言って攻撃する。

そこに言論の自由があるといえるだろうか。

「本離れが進んでいる」としきりに叫ばれるが、日本には未だ数百の小規模出版社が生き残っており、毎日地道に本づくりをやっている。そうしてつくられた本の中には、時代を鋭く見つめ、新しい時代を切り開こうとするものが沢山ある。

そして、現代社会の矛盾を何とかしたいと願う人たちがいて、良い本を届けようとする本屋が今も残っている。

だから今も、いつの時代も、本屋は時代を切り開く変革者たちのたまり場になる。

(ブログ『うさぎもかめも』より抜粋編集)

* * *



混乱する今だからこそ、本屋に行こう!

スローテンポ書店

小山駅前 ロブレ地階

日本を見つめ、世界を見つめ、自分を見つめる。
本があなたを待っています。

オープン: 火~土 13時~19時 (日月祝日休み)

☆懇話会 自慢話型、ディベート型を卒業し、課題解決型に挑戦中。土曜日午後3時~5時、参加無料。

水曜日から土曜日に変更しました。消毒と換気に気をつけております。感染防止距離を確保して話し合います。マスクをつけてご参加ください。

☆実用文教室 伝えたいことがきちんと伝わるようお手伝いします。木曜日午後3時~5時、参加費は資料代含めて、1回500円。